

第3号
2003.6

NEWS LETTER

東邦大学看護研究会事務局 〒143-0015 東京都大田区大森西4-16-20 TEL.03-3762-9881 FAX.03-3766-3914

実践に役立つ 本当の研究をめざして

東邦大学看護研究会会長
東邦大学医学部看護学科 学科長 村井 貞子



梶山祥子前会長のご退任に伴い、4月より東邦大学看護研究会の会長を拝命いたしました。

この研究会の目的は、「東邦大学の看護教育と看護の質の向上を図るためにお互いに研究と研鑽を進める」と会則に謳われており、具体的には2つの役割があると私は考えております。

第一には臨床、教育それぞれで何を考え、どのような研究が行われているか交流を図り、より良い看護を実現する方向付けを計ることです。東邦の看護を担っている3病院と2教育機関では、それぞれの方法で問題となっていることを研究し対処してきました。勿論それぞれに独自性を生かして研究を進めるとの重要性は言うまでもありませんが、多くの異なる立場からの意見を得、お互の考えを知り合い協力し、場合によっては反論し、切磋琢磨することにより、より良い看護を創造することができるのではないかでしょうか。

第二には、個人の持っている知識や経験を個人のものにしておくだけでなく、多くの人に客観的な知見として知らしめ、評価されるために、研究という手段に習熟する機会となることです。「研究」というと、業績のための学会発表や文章化を考えますが、むし

ろ日常の中での研究心が重要であり、本当に納得のゆく看護をするために、常に何が事実かを考え、どこに介入するかが大切であると思います。そのための研究であり、最終的には看護の向上をめざすことであると考えられます。

近年、よく言われるEBN(Evidence Based Nursing)は必ずしも新しい発想ではなく、根柢を持つものを言い、行なうことは人と人の関係の中では当然のことであったし、誰しもが考えていたことではないでしょうか。その方法論の代表が研究であると思います。従って、研究のための研究、業績のための研究ではなく、実践の役に立つ研究を進める努力をそれぞれの立場で進めて、お互いに検討し合える研究会になることを願っております。

研究会では本年から研究会誌を発行するべく、既に準備が進んでおります。一人の小さな研究から得られた小さな知見が850名を超す東邦の研究会の仲間に共有され、大きく膨らんで実践に役に立つことは、なんと素晴らしいことでしょう。この研究会を、会員の皆さんのが持つておられる力を将来の看護に向けて引出し、伸ばす機会にしたいと考えております。

研究指導を担当して感じていること

元千葉大学看護学部講師 湯浅 美千代

私が東邦大学医学部付属佐倉病院で看護研究の指導を始めて8年ほどになると思う。指導を始めた頃から、この病院の研究委員の方々も指導を受ける方も非常にしっかりしているという印象をもっている。ほかのいくつかの病院での研究指導では、指導者に頼りきっていたり、指導のスケジュールがルーズだったりしたのと対照的だった。だから、短時間に多くのグループを指導できる。そもそも、多くの研究グループができていないとそんなに指導できないのだが、ありがたいことに、この病院では相当な数の研究グループが私の前に現れてくる。

研究指導を受ける人たちの多くは自分たちの考えをもち、それを私に伝えてくれる。また、研究としてまとめるところや学会に発表するところは自力で完成してくれる。これは、研究を行う人に基礎的な思考力、文章構成力があるのはもちろん、病棟の研究委員や看護師長に熱意と指導力があるためだろうと思う。研究の完成には本人たちの努力が大きく関わ

っているが、サポートしてくれる人の影響も大きいことを感じる。

一方、私が力を入れているのは研究目的についての指導である。研究計画をたてる時点で、「どのような研究にしたいか」(例えば、アンケートをしたい、こういったことを患者さんに調査したい、こう改善したい等)ということは主張できても、それはなぜ必要なのか、それは何のためなのか、そもそも、何を疑問に感じ、何を明らかにしたいのかが不明確なことがある。これは他の病院での研究指導でも同様の傾向がある。

そういったことが多少不明確であっても、自分たちの考えが主張でき、それが看護にとって意味のあるものなら、最終的にはよい研究になり得る。それはわかっているのだが、やはり、研究を計画する段階で自分たちの研究をしっかりとみつめ、看護にとって意義ある研究をしてもらいたい。そうなるようお手伝いするのが私の役目だと思っているが、その役目を果たせているかどうか、不安なところもある。

大森病院の院内看護研究の現状

東邦大学医学部付属大森病院 副看護部長 伊東 和子

大森病院の院内看護研究発表会は、年4回おこなっており開催時期は6月・9月・12月・2月である。第1回目はエントリー制で6月におこなっている。残りの3回は輪番制であり、2年に1度の順番で各看護単位が発表している。1回の参加人数は、150名から180名で、スタッフ以外に研究に携わった他部門の方も出席している。参加者は、事前に配布された抄録をもとに発表を聴き質疑応答を行なっているが、年々活発になってきている。

13年・14年度にエントリーされた演題数は8題で内容は、専門分野の学会や研究会等で発表されたものや研修受講報告である。専門分野での研究は、少人数で取り組んでいたり、ライフワークとして1つのテーマを追究し研究している看護師もいる。

煩雑な業務を行なうながら大変な労力であると感じるが、一方研究することの意義を通して自己の成長を実感しやり甲斐を感じている姿に、他の看護師の「私もやってみよう」という気持ちをかき立てる機会にもなっているのではないかと思う。

また、輪番制での研究発表内容は、安全・安楽、看護方式、業務改善など患者サービス、看護の質向上に向けてのものが殆

どで、日々の看護実践の中から研究に繋がる糸口を見いただしている。

14年度は看護理論を用いて看護過程を展開した事例報告もあった。看護理論を用いることの意義について、自分の体験を通して学んだ報告は、多くの看護師達にも共通するものがあり関心が高まった。そのほか、無駄な支出を減らすために経営的視点から業務改善を行なった発表もされるようになってきている。

発表者は自信のなさから院外で発表することを躊躇することが多いが、「チャレンジしてみよう」という気持ちになり研究に取り組めるように支援する体制を整えることが看護部の課題である。看護師が、やってみたいと思う看護研究に、積極的に取り組めるよう、昨年より専任の講師を依頼した。卒後教育の中で、年2回の看護研究の講師を担当をしていただいていることもあり、研究していく上での示唆と助言は看護師に好評である。

最近では研究内容も充実してきており、院外の学会や研究会などにも投稿を試みている。今後も「発表当番にあたっているからさて何を研究するか」ではなく、自発的に研究に取り組める環境を整えていきたい。

第3回看護研究会のお知らせ

メインテーマ

「患者の心によりそう看護 —知識とケアリングの融合」

■日程

日 時 平成15年12月20日(土) 10:00~17:00

場 所 東邦大学医学部看護学科

■特別講演

「心によりそう看護の実践知」

講師 熊本大学医療技術短期大学教授 森田 敏子
座長 看護学科教授 齋藤 益子

■シンポジウム

「知識とケアリングの融合」

心を癒す看護師との出会い

支えあい医療人権センターコムル 辻本 好子

心によりそう看護実践

大橋病院看護部 ホスピス認定看護師 伊藤 郁美

感性を育む教育

東邦大学理学部 助教授 新保 幸洋

東邦大学の看護教育が大切にしているもの

東邦大学医学部看護学科 教授 村井 貞子

座長 看護企画室長 三沢 和江
看護学科教授 拜原 優子

尚、一般口演(研究発表・実践報告)・ポスターセッションも例年通りに行います。

抄録の原稿締め切りは10月31日です。奮ってご応募下さい。

《参加費》 会員：1,000円

非会員：2,000円



看護研究会誌への期待

東邦大学医学部看護学科 東邦大学看護研究会誌 編集委員長／斎藤益子

看護研究会誌第1号は原稿の査読もおわり現在修正中で、発行は十月を予定しています。今回、見送られた方も次回第2号に向けてご準備いただければ幸いです。第2号は来年の夏から秋を予定しています。

この機会に研究について、少し述べてみたいと思います。

研究は、発表することで世間に公表し、そこでディスカッションすることで公に曝されたことになります。論文の末尾に「本論の要旨は、第〇回〇×学会学術集会に於いて発表した。」と書かれていることがあります、これはその論文が学会で討論されたものであることを示しており、他者とのディスカッションがなされたものとして評価されます。

また、発表した研究は、原著論文として学会誌に投稿することで、初めて著者のオリジナリティが生かされます。いくら立派な研究でも原著論文にならなければ、書棚の奥にしまい込まれた宝物となり眠ってしまいます。オリジナリティはありません。多くの学会誌が論文受付日時を明記してあるのは、同じ研究が重なったとき、1日でも早く論文になったものが優先するという約束があるからです。論文がオリジナリティを持つかどうかは研究ではとても大切なことです。

昨年、私が性感染症学会に出した研究論文を査読した先生も、前年に同じものがあるという指摘をされました。前年度分のものも私自身の論文であることを明確にして初めて了解され、改めて論文の独自性の大切さを痛感しました。自分達の実践知を科学的根拠を示しながら、公のものにして行く作業は、回を重ねると楽しくなってきます。

私の恩師の有名な研究者が「誰もが見ているものを見て誰もが気づかないことに気づくことが研究のスタートである」といったのをよく思い出します。臨床には研究の芽が沢山散らばっています。研究のための研究でなく、実践者だからこそ出来る研究を東邦看護研究会もめざしていきたいと思います。他者が読んで理解でき、納得して自分も追試していくように科学的に表現することは易しいようで難しいものです。

自分達は研究の内容を全て理解しているので、つい表現が独りよがりになってしまいがちです。研究の目的、方法、結果、考察について科学的に表現することで、研究の信頼性、妥当性が高まり独創性が生きてきます。

そうはいってもまずは発表すること、そして書くことです。昨年の自分の研究を振り返っても、もう少し頑張ればよかったと思うことがあります。せっかくのデータを大切にしながら、なるべく眠らせずに日の目を見せてやりたいと思うこの頃です。

東邦大学看護研究会に入会しませんか？

年会費：2,000円

年1回の総会及び研究会と年2回のニュースレターを発行します。

東邦大学内の看護実践及び研究の現状を知り、親睦を深めることができます。



編集後記

東邦大学看護研究会のニュースレターも、第3号となりました。皆さんのご協力がなくては、良い紙面づくりができません。ここまで来れたのも皆さんのお蔭だと深く感謝しております。記事を書いてくださる方も、編集担当も仕事の合間を縫ってのことなので、発行が遅れ気味ですが、研究会の活動を皆さんに知っていただけるようにこれからも頑張ろうと思います。今後も、研究に関する記事や情報を是非お寄せください。

担当者

ニュースレター事務局

東邦大学佐倉看護専門学校 伊藤茂理
〒285-0841 千葉県佐倉市下志津292-13

TEL 043-462-8811

FAX 043-462-8810

e-mail: shigeri@med.toho-u.ac.jp